

静岡<523833>

図Ⅱ-2-14 静岡県広域に列挙地域土地利用現況図

各棒グラフの下の数字は、第3次地域区画コード(図Ⅱ-2-6参照)。

各棒グラフは各第3次地域区画(ほぼ1km²)内の土地利用の割合を示す。

から東海道線に沿って北東方向の一带、静岡駅の南方の一带、有度丘陵西方の清水港に面する一带に展開している。また、安倍川の兩岸にも中小規模の工場がみられるが、一般住宅地や農耕地あるいは商業地が混在するような地域を形成している。水田は静岡駅の北方と静岡駅南方で東名高速道路に沿う部分に集中している。後者についてはかつては有度丘陵西斜面の下から安倍川までの広い範囲のほとんどが水田地帯であったものと思われるが、現在まとまっているのは有度丘陵寄りの 1/4 の部分だけで、その西側は、都市的土地利用のためにほとんどが造成され、さらに西の安倍川に近い川は、前述のように工業地、一般住宅地、商業地との混在状態にある。

一方、有度丘陵は様々な土地利用がなされている。南斜面は傾斜が大きいため規模の大きい開発はないが、久能山と日本平を結ぶロープウェイは観光のひとつの軸となっている。南斜面基部と海岸沿いの狭い低地にはイチゴを中心とする畑地が連なっている。静岡市に面した北西斜面山麓には、東名高速道路が走り、その直上に静岡大学、英和女学院短大、静岡女子大などの文教施設が配列している。また、いくつかの住宅団地もみられる。その一带は現在もかなりの面積で残っているが、かつては茶畑が広がっていた部分である。それに対し、清水市に面した北東川斜面はミカン畑が広がっており、最近作られたサッカー場以外は規模の大きい都市的土地利用はなされていない。また、有度丘陵頂部の平坦面、いわゆる日本平にはゴルフ場をはじめいくつかのレクリエーション・観光施設が存在する。静岡県によって「日本平山頂及び北麓の公園整備」が計画中である。

2-5-2-4. 兵庫県（図Ⅱ-2-15および図Ⅱ-2-8（位置図））

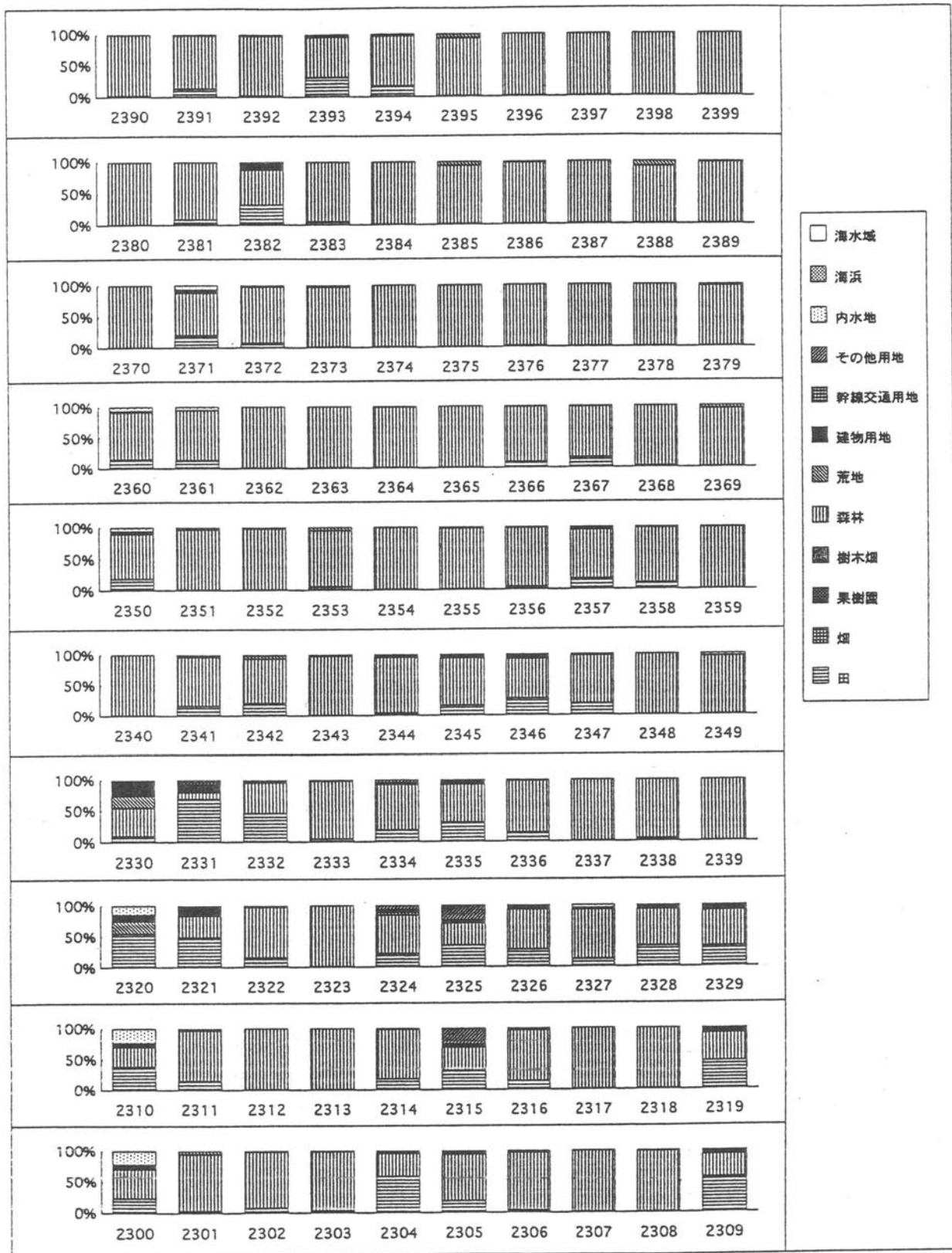
図Ⅱ-2-15によって当該地域の土地利用を概観すると、この地域のほぼ全域が「森林」が卓越している。但し、南部を中心に、河川沿いの低地に「建物用地」、「田」がみられる。

当該地域の南西端、千種川沿いに山陽本線が走っており、この支流に沿った与井、西野山から奥の集落にかけては水田が広がっている。この地区に隣接する丘陵地を切り開いて住宅団地が作られている。また、当該地域中央南部の矢野川とその支流に沿っても、水田と集落からなる農村地帯が広がる。その中の低山を造成して、ゴルフ場が1ヶ所作られている。また、この地区には変電所と工場も立地している。その他農村地帯が広がるのは、南東部の揖保川支流沿いの一带、北西部の千種川支流鞍居川沿いの一带などである。これらの農村地帯には各所にため池が存在するのがこの地域の特徴である。

当該地域の北部には、西播磨テクノポリス形成の中核となる播磨科学公園都市の建設が始まっており、またその公園都市と相生市などを結ぶ道路である播磨科学公園都市線が計画されており、今後のこの地域の変容に大きくかわるものとなる。

2-5-2-5. 沖縄県（図Ⅱ-2-16および図Ⅱ-2-10（位置図））

図Ⅱ-2-16によって当該地域の土地利用を概観すると、脊梁山地を中心に大部分が「森林」で占められ、海岸に沿って「畑」、「田」、「建物用地」が分布する。このうち「畑」は海岸段丘から山地にかけて、「田」と「建物用地」は低地

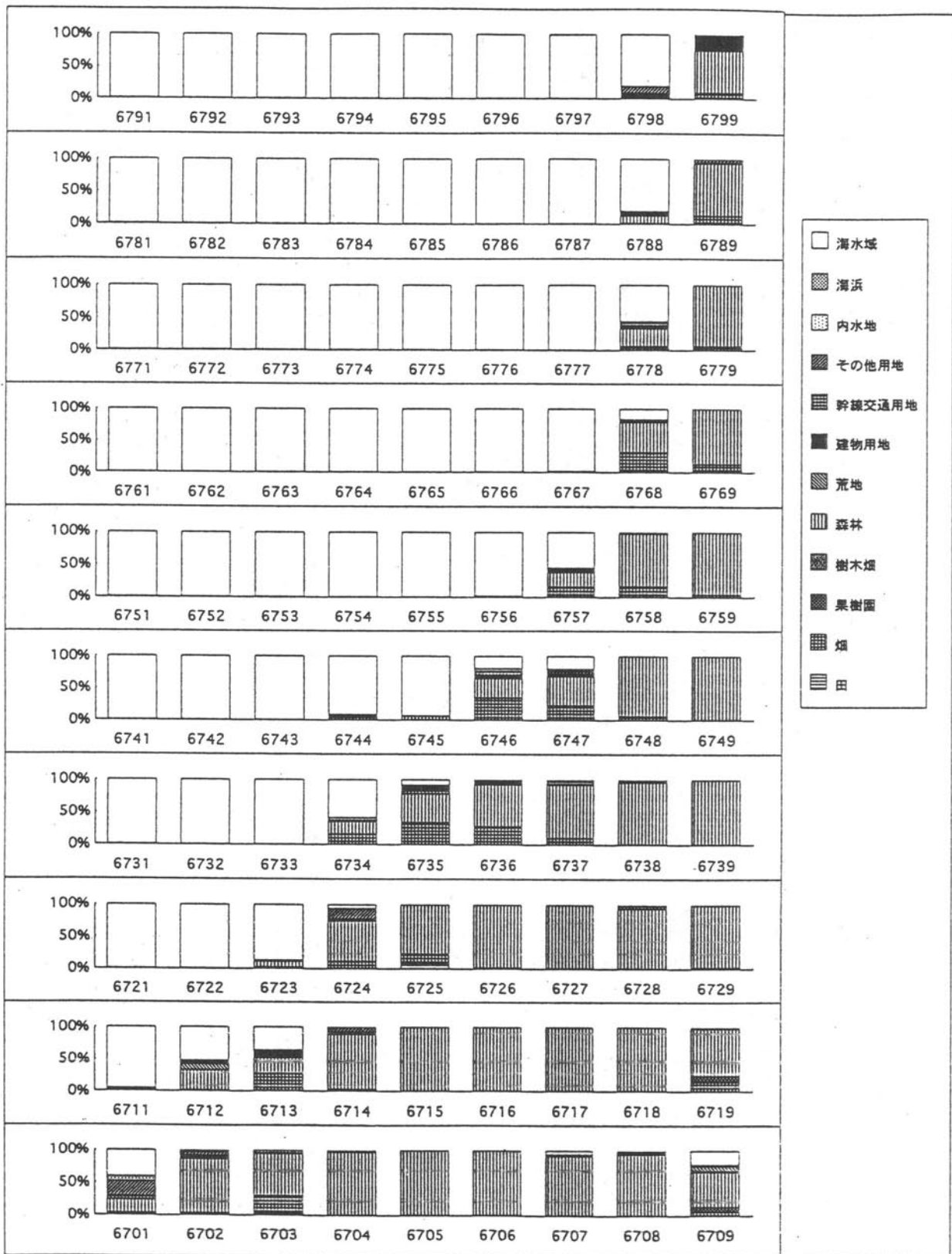


兵庫<5 2 3 4 2 3>

図II-2-15 兵庫県広域にわたる地域土地利用現況図

各棒グラフの下の数字は、第3次地域区画コード(図II-2-8参照)。

各棒グラフは各第3次地域区画(ほぼ1km²)内の土地利用の割合を示す。



沖縄<392767>

図Ⅱ-2-16 沖縄県広域に列挙地域土地利用現況図

各棒グラフの下の数字は、第3次地域区画コード(図Ⅱ-2-10参照)。

各棒グラフは各第3次地域区画(ほぼ1km²)内の土地利用の割合を示す。

に位置している。

山地には、ダム開発、道路開発、森林事業がみられる。太平洋側の斜面に2つのダムが作られている。道路開発は沖縄自動車道が太平洋側から東シナ海側に向かって走り、許田がその終点である。森林事業については生活環境保全林整備事業や県民の森整備事業がこの地域内で行われている。

海岸段丘上では、各所で農地開発事業や土地改良総合事業が行われており、それらの規模は15～53.4haである。またゴルフ場については、既設のものが1ヶ所と計画中のものが4ヶ所存在する。

低地・海岸については、名護市街地の西部への拡張に伴う水面埋立や国道58号の改良工事にともなう水面埋立がみられる。

2-5-3. 人口の推移

広域モニタリング地域調査の人口統計図（メッシュ図）に基づき、人口分布とその変化傾向について解析した。なお、各広域モニタリング地域ごとの総人口は表Ⅱ-2-4にまとめた。

表Ⅱ-2-4 各広域モニタリング地域の人口推移

		北海道	埼玉県	静岡県	兵庫県	沖縄県
昭和50年	昼間人口	-----	-----		-----	
	夜間人口	3,974	68,555		11,334	
昭和55年	昼間人口					6,413
	夜間人口					
昭和60年	昼間人口	6,819	80,932	294,555	7,153	6,375
	夜間人口	4,069	87,713		10,982	

単位：人

2-5-3-1. 北海道

当該地域の人口分布は、南部の市街地に集中しており、国道36号線、千歳線に沿ってある程度の分布がみられる。

昭和50年と昭和60年とを比較すると、地域全体としては微増している。地域ごとにみると、南西部の明野地区などやウトナイ湖の北方などでは土地造成と産業立地に伴う増加に起因しているのに対し、ウトナイ湖西岸のウトナイ温泉付近や沼之端駅付近では減少傾向にある。

昭和 60 年の夜間人口と昼間人口を比較すると、全体としては、昼間人口が夜間人口を上回っており、それは南部に苫小牧市の産業地帯の一部がこの範囲に含まれていることと一般住宅地がこの地域に少ないことが理由に上げられる。夜間人口の方が多なのは、沼之端駅付近と北東の農村地帯である。

2-5-3-2. 埼玉県

当該地域の人口分布は、東部の台地・丘陵帯に約 90%が集中している。

昭和 50 年と昭和 60 年とを比較すると、10 年間で 19,158 人(約 28%)増加している。日本の総人口が昭和 50 年から 60 年の 10 年間に約 6%増加しているのと比較しても、当該地域がいかに急激に増加しているかがわかる。概ね、当該地域の全域で増加がみられるが、特に毛呂山町の東武越生線沿いの増加が著しく、住宅団地開発によると考えられる。

昭和 60 年当時の昼間の人口と夜間の人口を比較すると、当該地域全体では夜 87,713 人に対し、昼は 80,932 人と 6,781 人少なく、当該地域はベッドタウン化しつつあると考えられる。なお、八高線より東側にあたる日高市・毛呂山町・坂戸市などの工業地帯では、昼の人口の方が多くなっているが、その周辺は夜の人口が多く、ドーナツ化現象もみられる。

平成 3 年には日高町、鶴ヶ島町がともに人口の増加により市になっていることと、最近さらに新しい団地の建設が行われていることから、昭和 60 年以後も人口の増加は続いていると考えられる。

2-5-3-3. 静岡県

当該地域の人口分布は、当然のことながら低地に大多数が集中している。中でも、駿府公園から北東へ向かう軸と南から東へ向かう軸で、1km²あたり 1 万人を越えるような地域があり、また北東端の清水市街地でも同様の地域がみられる。しかし、昭和 55 年と昭和 60 年を比較すると、上述の人口集中地では減少傾向にあり、むしろその周辺が増加するというドーナツ化現象が認められる。

2-5-3-4. 兵庫県

当該地域の人口分布は、河川沿いの地域に集中している。特に、南西部の山陽本線が走っている与井、西野、中野付近が多く、宅地開発がなされた神明寺付近の人口が最大である。

昭和 50 年と昭和 60 年とを比較すると、約 37%の減少を示しており、この傾向は宅地開発が行われた南西部地域を除いては、ほぼ全域でみられた。

昭和 60 年当時の昼間人口と夜間人口を比較すると、南西部の中野地区、中央部の矢野町瓜生地区北西部の桑野地区など、中心集落であったり工場が立地するところ以外では、夜間人口が昼間人口を上回っている。

2-5-3-5. 沖縄県

当該地域の人口分布は、海岸沿いの地域に集中している。特に、名護市市街地の一部がこの範囲に含まれ、1km²あたり 2,000 人を越える値を示す。それ以外は河川が流入する河口付近の低地に集落が立地しており、個々の集落の規模は 300 ～ 500

人である。

昭和 55 年と昭和 60 年とを比較すると、全体としてはほぼ同数である。大きく増加している地域は、名護市街の海岸付近であるが、許田付近と伊武部付近でも増加傾向がある。逆に許田の東と太平洋岸の松田では 100 人以上いた人口が 0 となっている。